

二つの『都市と柱』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本合, 陽 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008881">https://doi.org/10.14945/00008881</a>

## 二つの『都市と柱』

本 合 陽

ゴア・ヴィダルは華麗な経歴の持ち主である。しかし、デビュー当時華やかに注目された割に、作家としての文学史上の評価は低い。そのひとつの原因が、『都市と柱』の出版によるところが大きいというのは、多くの批評家の述べる通りであろう。<sup>1</sup>『都市と柱』が、当時の文壇ではやはりショッキングな作品であったことは間違いない。しかも作者自身、作品をどのような位置づけとして発表したかったのかについては、なかなかやっかいな問題が存在する。その問題は、作者が1965年になって、改訂版を自ら出版した事情と絡んでくる。その辺りの問題を考えつつ、『都市と柱』の位置づけを確認するのが、この小論の目的である。1948年初版出版当時の事情、初版に対する批評、作者による改訂の事情と、改訂版への反応。こういったものを見ていくことにより、この作品の評価とともに、ゴア・ヴィダルという作家の姿も浮かび上がらせることができると願っている。

ゴア・ヴィダルの作家としての経歴は、『ウィリウオー』（1946）の発表を持って始まる。彼はこの作品で、ハリケーンに襲われた軍艦上の人々の様子を描き、第二次大戦を舞台とする小説の中でもとりわけ注目を集め、ヘミングウェイの後を継ぐ作家として将来を嘱望された。ところが彼にとって『都市と柱』は、別の意味で大きな意味を持つ作品だった。改訂版の後書きで、「安全に振る舞うのには飽き飽きしてしまった。危険を冒し、アメリカ人がこれまでにやってこなかったことをやってみたかった」と記し、<sup>2</sup> また当時親しくつき合っていたアナイス・ニンにもこの作品にかける意気込みについて述べており、<sup>3</sup> ヴィダル自身にとって非常に重要な位置を占める作品になるはずであった。またヴィダルは、1946年にはこの作品を完成していたらしいが、そのことから、彼自身

の文学上の評価が確立するまで出版を見合わせていたと考えうると指摘する批評家もいる。<sup>4</sup> ヴィダルにとってこの作品は、文学者ヴィダルが描くことにこそ意味があったのだろう。

1948年という年は、後にキンゼーが、男子の三分の一が同性愛体験を持ったことがあるという報告をし、その衝撃的な内容に世間が驚愕に包まれた年であるが、かといって同性愛が現在のように市民権を得ていたわけではなく、文学を例に取れば、大衆文学という隠れ蓑を借りてようやく暗示できる程度の段階に過ぎず、いわゆる文学者がこの主題を正面切って扱った例はなかったと言える。同年に出版されたトルーマン・カポーティの『遠い声、遠い部屋』を考えてみればよくわかる。<sup>5</sup>

『都市と柱』初版は、好意的な書評で迎えられたとは言いがたい。ヴィダルは最近『パリンプセスト』（もとの字句を消した上に字句を記したものという意味）と題した回顧録を出している。それを通読すれば、彼がいかにも『都市と柱』にこだわっていたかよくわかるのだが、その中でこんな風書いている。

ダットン編集者が、もしこの本が出版されれば、私は二十年にわたり悪い書評を受けることになり、私の文学的評判は永遠に終わってしまうだろうと話していた。<sup>6</sup>

初期の書評は好意的でないものが多い。『ニュー・ Yorker』はこの作品を、「逮捕告訴記録簿」にすぎず、「芸術としてみれば、同性愛文学が飾り気のないタブロイド新聞の文章のレベルまで落ちてしまったことを示す、最新の、そしておそらく極端な例となっている」と、ぱっさり切捨てた。<sup>7</sup> 『ハドソン・レビュー』も、「彼の本は本来小論文である」と片づける。<sup>8</sup> さらに、「ヴィダル氏のアプローチは冷静で臨床医の報告のようであり」、「全体を通して見えてくる図は、特に好奇心をそそることもなく退屈なだけである」。<sup>9</sup>

好意的な書評がないわけではない。『サタデー・レビュー・オブ・リテラチャー』は批評家に評判が良くないのは、扱っている主題のために毛嫌いされているか

らだと援護し、<sup>10</sup>『リスナー』では、「いい小説」で、「作者の記述には想像力があふれている」とまで評価している。<sup>11</sup> また、『サタデー・レビュー』によせたジョン・アルドリッジの最初の反応は、(彼は後、自著『ロスト・ジェネレーション以降』の中では180度見解を変えたようであるが)、「空虚さのただ中で、悲劇的な肯定をなしえた点で」「印象的である」というものであり、<sup>12</sup> クリスタファー・イシャウッドは、この作品は「英語で書かれたこの類の小説の中では最上の部類に属する。感傷的ではないし、(中略) 包み隠そうとしていない」と、高く評価している。<sup>13</sup> しかし、ヴィダルは否定的な批評を非常に気にしていたようだ。<sup>14</sup> 当時、圧倒的に厳しい書評が多かったのは事実だが、改訂という思い切った行為の背景には、評価の問題だけでは片づけられない何かがあったと考えてもいいだろう。改訂版に後書きをつけ、後書きの主張に合うように性の抑圧に関するエッセーを発表し、「自分自身の作品の改訂に関して」と題するエッセイまでも著しているあたり、<sup>15</sup> 改訂にかける意気込みは並大抵のものではない。

「後にテネシーがあの本を実際に読み、(中略)『いいかい、君はあの本をあの結末で台無しにしてしまったんだ。君はどんなにすばらしい本をものにしたかわかっていなかったんだね』」とヴィダルは後に記し、<sup>16</sup> 改訂はテネシー・ウィリアムズによって示唆されたかのように述べており、また「自分自身の作品の改訂に関して」の中で、改訂の主な目的は、多く誤解を与えることになった結末を変更することにあつたと言明している。確かにヴィダルの説明は、改訂版の最後につけられた後書きと合わせ考えると、納得のいくものであり、後に紹介するが、改訂により作者の意図は多くの読者に確かに伝わった。ただあまりの力の入れように、批評家の鼻をあかしたいという作家根性だけではない、作者の隠れた意図が読みとれるような気持ちが出て仕方がないのである。

今まで述べてきたような事情を念頭に置き、改訂された箇所に関わる問題を指摘していると思われる批評をいくつか紹介しておこう。まずは結末についてである。

物語の結末になってヴィダル氏は絶望感を作品に持ち込んだ。彼は爆発的な結末を作り上げた。だがそれはメロドラマティックになることによってであった。<sup>17</sup>

もしこの本に持ち出された挑戦的な議論の背後に、運動を押し進める精神があることが感じられなければ、ヴィダル氏のぶっきらぼうで冷静な筆致により、ジム・ウィラード達はこの時代、彼らのジレンマを自分たちで何とかしようとするれば、敵意か、よくても悲劇的結末しか得られないのだと、簡単に納得しておしまいになるかもしれない。こんな結末を作者が用意したと信じることは難しい。<sup>18</sup>

次に、後ほど問題にする点を指摘したものを紹介しよう。一つはレスリー・フィードラーが『ケニオン・レビュー』に発表したもので、もう一つはアナイス・ニンがヴィダルに宛てて書いた手紙からの引用である。彼女はこれを投函せず、直接彼に見せたそうだが、ヴィダルは非常にショックを受けたようだったと記している。<sup>19</sup>

しかしこの作品は、描き出そうとする人間感情の不在、つまり運動選手である主人公の動物的な意識としか言えないものを、最後まで持ち続けていられない。一つの問題は、同性愛を分析し、同性愛が自由に存在するユートピアを提案する長くてわざとらしい会話が差し挟まれていること、もう一つの問題は、小説の名前に暗示されるシンボリズムである。作品のどこにも描き込まれていないような広がりを持つシンボリズムを、題の五つの単語によって持ち出そうとする不当な仕掛けが問題なのだ。<sup>20</sup>

あなたの物語の中で、ジムがボブを殺すのは、二人が一度だけ持った性的関係をボブがロマンティックなものに見なさず、大して重要ではない性的事件としか思わなかったからなのだ。それでジムは怒った。初めての性的出会い

をジムは理想化したが、ボブにはそんなものは無意味だった。それでジムはボブを殺した。ジムは自分の中の伝説を殺したのだ。だが実際には伝説などなかった。あったのは、ジムが現実を理想化しないではいられなかったってことだけ。今あなたの小説を読んでいて、あなたの無意識が暴かれている気がするわ。(中略) あなたは傷ついていたの、だから今からはあなたが他の人を傷つけるのよ。信じることなく生きているから、あなたの世界は灰色で辛辣になるのよ。すべてを金に変えてくれる唯一の変革者、錬金術士は愛なの。死、年齢、日常生活に対抗する唯一の魔法、それは愛よ。あなたのお母さまは、私には知り得ないほどあなたを傷つけたのね。<sup>21</sup>

まずヴィダル自身が改訂の意図について述べていることを、改訂版の後書きから論点を整理して述べよう。それから実際に改訂されたものを初版と読み比べ、改訂の特徴をまとめたい。その上で、作者の意図と比べて考えてみよう。

改訂版の後書き、「二十年後の『都市と柱』」の中でヴィダルが述べていることをまとめるとこのようになる。これまでにアメリカ人がしたことのないことをしたく思い、同性愛の地下社会を探求することに決め、「その過程で、同性愛の関係の『自然さ』を」描こうとした。性的な関わり合いにおいて、「カテゴリー分けは不可能であり」、「あらゆる人間はバイセクシュアルである」のだが、『都市と柱』を書いた時代、同性愛は心の病気という迷信があり、それ故「中流階級の普通の少年」を主人公にすることにより、そういったステレオタイプを打ち破ろうとしたのだ。「想像力」を駆使し、また本当らしくするため、ジェームズ・T・ファレルのドキュメントをほうふつとさせる単調で、陰鬱な散文で描くことにした。ジム・ウィラードによって、「あまりに振り返ることで」自分が滅んでしまう「ロマンティックな誤謬」を示そうと思った。<sup>22</sup>

では次に改訂版と初版とを読み比べて、変更点をまとめてみよう。第一点は、文章を全体的に簡潔に書き直している点である。次に、ジムの「夢」や、ボブとの性的関係の強調である。それから結末部に関する10章、11章の変更で、もちろん一番大きなものはジムによるボブ殺害から強姦への変更であるが、それ

に伴って最後の場面もかなり変更されている。改訂版では「ジムは彼の人生のもっとも大事なもの、ボブと伝説を壊してしまった」という記述が消され、<sup>23</sup>「かつてあったものは何も変わらない。しかしあるものは以前と同じではありえない」と、<sup>24</sup>ボブとのあの夜に印象的に登場していた川の意味を見いだす場面で終わる。またボブを強姦した後、「円環は完了した」(Rev. 151)という言葉が付け足され、作品の構造が明確になっている。

次に、改訂版では省かれた点を二つ述べたい。一つは同性愛とアメリカの社会に関する議論だ。9章の1でジムがショーと再会し、誘われたパーティーの席上、白髪の男を中心に交わされるものである。改訂版ではその議論は完全に削除されている。またこのこととも関わるが、女性に関しては二カ所ほど気になる削除がある。一つはジムがサリバンと別れる前、「僕は女を恐がっていると思うかい」(271)とジムが尋ねる場面である。サリバンは、ジムは女性の体を恐がっているだけなので、マリアと関係を持てば「ノーマル」になれたらうと言う。ジムはボブとのことを思い、「ジムの同性愛は、否定の結果ではなく、女性を憎み恐れた結果でもなかった。むしろ、とても肯定的な愛に由来するのだ」(271)と考える。このやりとりがすべて削除されているのだ。さらに、ボブと再会したジムは、ボブに彼の父のことを訪ねた後、「母は変わってしまい、違う女になり、うるさくせがむ女、父に対して持っていた恐れによって抑圧されることのなくなった女になってしまったので、今母のことを好きと言えるかどうかと思った」(299)のだが、このくだりもすっかり削られている。

ここまでを整理すると次のことがわかる。変更点は作者自身の言葉による改訂の意図を反映しているが、それに対し、削除された点について作者は後書きで一言も触れていない。これはあやしい。おそらく改訂に関する一番の大きな問題点は、作者が触れていない削除された部分にあったと推論できる。改訂しなければ、「ホモセクシュアリスト」(ヴィダルは同性愛者を示す名詞としてこの語を用いるべきだと述べている)の「普通さ」を主張するどころか、その逆の主張をしてしまう危険すらあったのではないか。こういった仮定に基づき、もう少し立ち入った議論をしてみたい。

例えばこんな例から始めてみよう。改訂版で、ジムがボブと再会する前、同級生で今はボブの妻であるサリーと会って話す場面があるが、そのときジムはボブが他の男と寝たことがあるかどうか想像してみる。ジムには想像できない。「ボブが彼と寝たのは、男に対する肉欲からではなく、愛情からだったことを意味する」のである。ボブが彼以外の男とは関係を持たないことが、二人の関係をより「普通ではなく、つなぎ止めるもの」(Rev. 143)にすると、ジムは考える。

この場面、初版では、「ジムはボブがホモセクシュアルになっていたら驚いたことだろう。それほど好きではなくなったかもしれない。なぜならボブへの愛は、一人の人間として、ボブが彼に引きつけられていることに由来するからである」(292)とある。ここの所、注意深く読むと、ホモセクシュアルであることと、お互い一人の人間として引き合うこととは、相対立する概念であることがわかる。とすれば、ホモセクシュアルの普通さを描く作品であるという主張にも関わらず、作者の記述がそれを裏切ってしまうことになる。おそらくこの点が作者にとって、まず一つの問題であったと考えられる。

さて、改訂に関し、一番興味深いホモセクシュアルをめぐる議論を整理してみよう。それを読めば、今述べた点を、実は作者が作品の中で補強する理論をうっかり(?)持ち出しており、それを基に考えれば、作者はこの作品の中で描かれるホモセクシュアルな世界を、実は肯定していなかったことがよくわかる。

ショーに再会し、パーティーに誘われたジムは、その席で同性愛についての議論を耳にすることになる。同性愛には二種類あって、一つは「チュートン式」理論に基づくとされる原初の形態の同性愛で、それに対してもう一つは、アメリカやイギリスで見られる神経症に基づく女性的な同性愛である。この二種類の同性愛についての紹介があった後で、改訂版では「誰もが生まれながら両性愛なのだ」(Rev. 119)と一挙に結論づけられ、その議論はそれ以上の展開を見せない。だが初版ではずいぶんと異なっていた。

アメリカでは女性、特に母が崇拝され、力を持つ。その女性に支配されて、男の子は歪んでいく。本来弱い女性が男を支配するので、結婚してみると欲求

不満になり、子供に満たされぬ愛情をもっぱらそそぎ込むことになる。男の子は意志の強い女性に押しつぶされてしまい、女性を嫌い、同性に関心を向けるようになる。同性愛でない者も、母に献身するよう育てられるので、母の支配を受け入れ、しかしそれからつかの間でも逃げ出さないではいられなくなる。同性愛の男は女性の支配に対し反乱している者のことであるとも言える。ともかくこの現状を変えるためには、夫としての男が力を回復し、男本来の存在である「打ち立てる者、戦士」に立ち戻ることが必要である。そうすれば、同性愛は存在しても、「原初の」種類の同性愛に立ち返ることができる。それ故、母権的なこの社会こそ問題なのだ。(235-41)

この議論は、初版では7ページにもわたり繰り広げられており、作品の中でも大きな位置を占めるものであったと考えることができる。では、この議論を踏まえ、前に述べたことを考え直してみよう。ジムがホモセクシュアルという言葉でイメージしているのは、どうやら女性的な要素を持った同性愛である。そしてジムがボブと別れて以来、遍歴の旅で出会った多くの同性愛者はこのタイプである。つまり、ジムは「原初の」「チュートン式」同性愛者以外の者を否定する地点に、性の遍歴の末たどり着くことになり、それ故二人の原初の瞬間は理想化されることになる。さらにその理想化故に、ボブの拒絶に対し怒りを覚え、ボブ殺害とともに、「夢は打ち砕かれ」、「ジムもまた打ち砕かれ」(307)、「彼の人生のもっとも重要な部分、ボブとあの伝説を破壊してしまった」(314) ことになるのだ。

ボブとの最初の肉体的接触は、ジムの心の中で様々な体験と理論により理想化されていった。ところがボブはというと、妻をめとり、自分は海の生活を続けたいと思っているのに妻の要求にからめ取られ、陸に上がる決心をしている。作中の議論に照らせば、ボブは女性の支配に屈した形になる。アメリカの現実、つまり女性による支配から逃れ、プラトンがアリストファネスに語らせた、原初の形の同性愛の理想を二人で追求する夢は、はかなくもついでてしまう。ボブが現実と妥協してしまったためだ。ボブに拒絶され、水夫仲間だったコリンズが彼に投げかけた「変態 (queer)」という言葉も、今度はボブにより浴びせ

かけられたことからボブ殺害に至るジムの怒りの背後には、裏切り行為ともとれるボブの転向への憤りがあるはずなのだ。

「ジムの同性愛は、否定の結果ではなく、女性を憎み恐れた結果でもなかった。むしろ、とても肯定的な愛に由来するのだ」(271)とあるのはすでに紹介した。確かにジムのボブに対する愛情は「肯定的な愛情」であったかもしれない。しかしジムの理想がアメリカの現実とは相容れないものであるならば、ジムは性の遍歴を重ねた結果、アメリカの現実は「肯定的な愛」に由来しない同性への愛情で満ちていることに、気づかないではいられなくなる。中でもニュー・ヨークは「新しいソドム」(246)にふさわしく、全国から同性愛者が集まってくる。今の論理で行けば、ジムはこの「新しいソドム」を肯定できるはずがない。作者は同性愛の「普通さ」を描くと言いながら、ジムの理想化した同性愛しか、物語の中で肯定していないことになるのだ。

別の面から考えてみよう。作品の題「都市と柱」の意味は一見明白に思われる。作者自身、初版では第二部「塩の柱」の題辞に、改訂版では全体の題辞に、旧約聖書創世記の言葉を引用しているのである。主の教えに背きソドムの町を振り返ったため、塩の柱にされてしまったロトの妻。そのアレゴリーは明らかに思われるだろう。振り返って「新しいソドム」を形成する女の支配下に落ちてしまったので、ボブは死ななければならなかった。いやちょっと待てよ。これでは変だ。振り返るのはジムのはずだ。ジムが振り返ったとしたら、彼の見たものは理想化された原初の同性愛である。原初の同性愛を夢想することは果たして主の命令に背くことなのだろうか。

作者による解説にもあるように、さすがに改訂版では、「振り返ることの」「ロマンティックな誤謬」、そもそも自分で現実を歪め理想化してしまったジムの問題がクローズアップされることになり、「塩の柱」になるのは、現実を見ることなく過去の、しかも勝手に理想化した同性愛関係にしか目を向けられなかったジムであるのは明白になっている。だが初版ではそのところがはっきりしていなかった。フィードラーが疑問を呈するのも仕方がない。さらに言えば、本当に改訂版の後書きで述べていることを描く目的で、作者はこの作品を

構想したのだろうかという疑問さえ浮かんでくる。

さらに今の議論を基に、ジムが母の変化を思う場面を考えると、母は父の死により、アメリカの男を駄目にする強い女へと変身したと考えることができ、すると、ヴィダルがアナイス・ニンに言われた母親の影響を、実は肯定してしまうことになる。そもそも冒頭の場面で、ジムが強く反発していたのは父に対してであったのに、父はジムが留守をしている間に亡くなってしまっている。母に対してはある種の同情心を抱いていたはずだったのだから、母の変化を見て、「彼女は自分自身の顔を獲得していた」(Rev. 138)とだけ反応する改訂版の記述ならごく自然に受けとめることができるのだが、初版のように母の変化を受け入れられるかなどと考え込んでしまえば、ニンに「今あなたの小説を読んでいて、あなたの無意識が暴かれている気がするわ」と言われても、仕方がないように思われる。

後年、『都市と柱』を同性愛文学の観点から論じる批評が多く出てくるようになるが、先走ってそれを援用すれば、「ゲイ解放運動後の70年代から見れば、ヴィダルの主題には幾分同性愛嫌悪の調子がある。(中略)もしも『都市と柱』のあちこちに同性愛のステレオタイプを打ち砕くより永続化するところがあるとすれば、作者が一人その責任を負っている」という批評の言葉に、<sup>25</sup> ヴィダルが描いてしまった世界をかいま見ることができるだろう。改訂版の後書きで述べ、1965年に発表した「セックスと法律」と題したエッセイで、さらに1979年にも同様の主旨をさらに発展させた「性は政治だ」というエッセイで、繰り返し同性愛に対する圧力を主張しないではいられなかった背景に、ヴィダルが無意識に描いてしまったジムへの反省があったと考えてもそれほど間違っていないだろう。<sup>26</sup>

さてこれで初版の問題点はかなりはっきりしてきたことと思われる。それでは改訂版への反応を書評を中心にまとめ、その後で最近の評価の動向を紹介してこの小論を終わることにしよう。

改訂版が出た当初も、書評はあまり好意的ではなかったようだ。ロマンティッ

クな誤謬を指摘するという作者の意図が十分に伝わってこないとする見方や、<sup>27</sup>「新しい版はオリジナルの版と比べ、整然とし、引き締まり、鮮明になっているが、それほど興味深い本ではない」<sup>28</sup>といった書評が多かった。ただし、スタイルの点では前進したと考える批評家もまた多かった。<sup>29</sup>しかし前向きの評価は、むしろ時間が経つにつれ、同性愛という主題がオープンに論議されるようになってから徐々に増えてきたように思われる。

1968年の本の中でバーマンは、小説としての価値には限定付きだとしつつも、改訂され強姦という結末にしたことにより、主人公にカタルシスをもたらす効果があり、ポールドウィンのような立派さを持つに至ったと、一応の評価をしている。<sup>30</sup> またヴィダル研究の書、『背教の天使』の中で、ディックはレスリー・フィードラーの説を持ち出し、「男だけのエデン」というアメリカの神話を破るものには原罪が待ちかまえているという、脱神話化されたアメリカのウィルダネス小説、または神話の秘密を暴く小説ととらえてこの作品を評価している。彼の場合、改訂版と初版とは基本的に変わらないという見解である。<sup>31</sup> 前に引用したが、オースティンは『ゲームを演じて — アメリカの同性愛小説』という、アメリカの同性愛を扱った小説の通史の中で、当時の同性愛嫌悪が支配的な時代背景に照らし、ヴィダルが『都市と柱』で同性愛の普通さを描こうとした点を評価した上で、ヴィダル自身その同性愛嫌悪を多少内面化していた疑いがあると述べ、ディックがアメリカの古典小説の伝統の線上でとらえようとしたのに対し、テオクリトスの『田園詩』の系譜に連なる同性愛文学の線上に位置づける。<sup>32</sup> またスティーブン・アダムズは、後ろを振り返るロマンティックな誤謬、「この無垢な性愛の石化」を描くものであるとして作者の意図を評価するが、同性愛の普通さを描くという点では説得力に欠けると判断している。<sup>33</sup>

キアーナンは、ディック同様、アメリカ文学の主流につながるものだとしたうえで、作品の主題はそのままの人間であり、矛盾を矛盾のまま提示する主人公を描き出すことであり、改訂版によってそれに成功したと積極的に評価する。<sup>34</sup> 積極的な評価という点でいえば、もっとも新しい批評二つが挙げられる。サマーズは、『都市と柱』の神話的要素が作品の単調で抑えられたスタイルを豊かな

ものにしていてと考え、神話的要素をいくつも指摘し、その上で、改訂された結末はそれほどメロドラマティックではなくなり、ジムはボブと再会することで自己認識への道を進むことになり、彼を過去に縛っていた間違っただロマンティシズムから解放され、明るい未来へと歩き出すと考えている。<sup>35</sup> またコーバーは、「小説の悲劇的結末は自殺傾向の同性愛者というステレオタイプを助長する」というコーリーの説への反論から出発し、それはフィードラーの読みと同列であると考え、このような誤読が生じるのは、ヴィダルの主張する「人間はみんなバイセクシュアルである」という主張が、ジムの「同性愛の男性の主体性」に見事に体现されていることを理解していないからだと論じる。<sup>36</sup> このような極端に積極的な評価には多少の疑問を感じないではないが、少なくとも改訂されたことにより、すっきりとした印象になり、主題もかなり明確になったと思われる。

『都市と柱』は、いろんな意味で問題小説だった。初版の出た時点では、同性愛の主人公を登場させ、当時の同性愛のアンダー・グラウンドな世界を白日の下に曝したという点で、少なくとも評価されるべき作品である。しかしその中に、おそらくは無意識に作者は、当時の同性愛嫌悪の偏見に基づく様々な要素を結果的に持ち込んでしまった。ヴィダルがこの作品にいつまでもこだわるのは、生のヴィダルがかいま見える唯一の作品だからに違いない。『都市と柱』を含む初期の三作を改訂した後、続々と歴史小説を描いているのを考えると、改訂によって過去の自分と決別しようとしたのだろう。そういった意味でも、この作品は今でも興味深いものであり続けている。

紹介した最近の批評が改訂版を過大評価するのは、ゲイ・フィクション自体の地位を高めようという試みと考えられるので、作品自体の評価としては多少割り引いて考えなければならないが、改訂されたことによって、将来にわたって読みつがれるに値する作品になったと、私としては評価したい。私個人としてはオースティンやキアーナンの見解に近いのであるが、みなさんはどうお読みになるであろうか。

## 注

1. 例えば、David Barton, "Narrative Patterns in the Novels of Gore Vidal," *Notes on Contemporary Literature*, Sept. 1981, 3-5を見よ。
2. Gore Vidal, "The City and the Pillar After Twenty Years," in *Reflections upon a Sinking Ship* (London: Heinemann, 1969), 118.
3. Anais Nin, *The Diary of Anais Nin: 1944-1947*, Gunther Stuhlmann, ed. (New York: A Harvest/HBJ Book, 1971), 117.
4. Roger Austen, *Playing the Game: The Homosexual Novel in America* (Indianapolis and New York: The Bobbs-Merrill, 1977), 119.
5. Akira Hongoh, "Gerda Coming out of the Cave: A Study of *Other Voices, Other Rooms*," 『静岡大学人文学部人文論集』第5号の1、1994年7月30日、211-14参照。
6. Gore Vidal, *Palimpsest: A Memoir* (New York: Random House, 1995), 122.
7. "Review of *The City and the Pillar*," *New Yorker*, 10 January 1948, 74. これに関しては、ヴィダル自身かなりこだわっていたようで、回顧録でもこの書評について触れている。See, *Palimpsest*, 189.
8. J.S. Shrike, "Recent Phenomena," *Hudson Review*, Spring 1948, 137-38.
9. C.V. Terry, "Review of *The City and the Pillar*," *New York Times Book Review*, 11 January 1948, 22.
10. Richard McLaughlin, "Precarious Status," *Saturday Review of Literature*, 12 February 1949, 42.
11. P. H. Newby, "New Novels," *Listener*, 5 May 1949, 774.
12. John W. Aldridge, "America's Young Novelists: Uneasy Inheritors of a Revolution," *Saturday Review of Literature*, 12 February 1949, 42. 見解の変化については、John Aldridge, *After the Lost Generation: A*

- Critical Study of the Writers of Two Wars* (1951; rpt. New York, Noonday, 1963), 170-83を見よ。
13. Cited in Austen, 121.
  14. Austen, 122.
  15. *Reflections upon a Sinking Ship* 所収。
  16. Gore Vidal, "Some Memories of the Glorious Bird," in *Matters of Fact and Fiction* (1976; rpt. London: Panther, 1978), 166.
  17. Edward Dermot Doyle, "An Honest Approach," *San Francisco Chronicle*, 2 February 1948, 14.
  18. Aldridge, "America's Young Novelists," 15.
  19. Nin, 175.
  20. Leslie Fiedler, "The Fate of the Novel," *Kenyon Review*, Summer 1948, 523.
  21. Nin, 174.
  22. *Reflections upon a Sinking Ship*, 118-21.
  23. Gore Vidal, *The City and the Pillar* (New York: Grosset and Dunlap, 1948), 314. 初版からの引用はすべてこの版からであり、ページ数のみ記す。
  24. Gore Vidal, *The City and the Pillar*, Revised Edition (1965; rpt. London: Panther, 1978), 155. 改訂版からの引用はすべてこの版からであり、Rev. と略記した上でページ数を記す。
  25. Austen, 123.
  26. Gore Vidal, "Sex and the Law," in *Reflections upon a Sinking Ship*, 100-10; Gore Vidal, "Sex Is Politics," in *Pink Triangle and Yellow Star and Other Essays 1976-1982* (1982; rpt. London: Panther, 1983), 188-209.
  27. R.G.C. Price, "New Novels 1965," *Punch*, 6 October 1965, 512.
  28. Steven Marcus, "A Second Look at Sodom." Cited in Robert J. Stanton, *Gore Vidal: A Primary and Secondary Bibliography* (Boston: G. K. Hall,

- 1978), 103.
29. Robert H. Donahugh, "Review of *The City and the Pillar*," *Library Journal*, 15 May 1965, 2290; Richard Mayne, "Make 'em Wait," *New Statesman*, 1 October 1965, 489.
30. Ronald Berman, *America in the Sixties: an Intellectual History*. (New York: Harper and Row, 1968), 256.
31. Bernard F. Dick, *The Apostate Angel: A Critical Study of Gore Vidal* (New York: Random House, 1974), 31–36.
32. Austen, 118–25.
33. Stephen Adams, *The Homosexual as Hero in Contemporary Fiction* (London: Vision, 1980), 15–25.
34. Robert F. Kiernan, *Gore Vidal* (New York: Frederick Unger, 1982), 37–44.
35. Claude J. Summers, "The *City and the Pillar* as Gay Fiction," in Jay Parini ed., *Gore Vidal: Writer Against the Grain* (New York: Columbia UP, 1992), 56–75. この論文は元々は Claude J. Summers, *Gay Fictions: Wilde to Stonewall* (New York: Frederick Ungar, 1990) の中で、"The Cabin and the River": Gore Vidal's *The City and the Pillar*" と題して収録されていたものだが、Parini編による論文集のため書き直しているため、新しいものを参照することにした。
36. Robert J. Cober, "Gore Vidal and the Erotics of Masculinity," *Western Humanities Review*, Spring 1994, 30–52.